多彩に展開される“ミュージアム・リレー”第 100 走を迎えて

～地域ミュージアムが創りだすネットワーク活動～

奥野花代子（学芸員）

写真 1　箱根・芦ノ湖成川美術館での第 96 走ミュージアム・リレー（2005.9）.

写真 2　箱根町立箱根湿生花園での第 92 走ミュージアム・リレー（2005.5）.

写真 3　当館での第 95 走ミュージアム・リレー（2005.8）. 左に掲げられた旗は、江戸民具街道館長のデザインによる会旗.

写真 4　本間寄木美術館での第 15 走ミュージアム・リレー（1998.12）. 寄木によるコースター製作.

1. はじめに

21 世紀は情報化社会ともネットワーク時代とも言われ、博物館界でも相互連携と様々なニーズを反映した活動が求められています。これを目指して、ネットワーク化を図っているのが「神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会」（以下、連絡会と称す）で、当館が事務局を務めています。

そこで、この連絡会が立地条件と各ミュージアムの特色を活かして取り組んでいる活動を紹介します。

連絡会誕生のきっかけは、当館が開館した翌年の 1996（平成 8）年春に、周辺のミュージアムに対して、「連携・協調して、新しい博物館のあり方を考えていこう」と呼びかけたことでした。これに賛同されたミュージアムにより、同年 7 月、発足しました。館種や規模、設立母体などにこだわらず、会費もなく、会長もおかない、“ゆるやかなつながり”が基本で、メンバーの共通認識としての簡単な会則を設けています。

第 1 条に「二十一世紀の本格的な生涯学習時代に相応しい開かれたミュージアムのあり方を神奈川県西部地域のミュージアムが交流・情報交換等を通じて探究し、相互の施設の発展と振興、学術文化の進展に寄与するとともにより一層の親交を深める」と目的が記されています。

ところで、神奈川県内には私設を含めて 300 近くのミュージアムが在ると言われています。なかでも、県西部地域には城郭や旧街道を中心に歴史的遺産が多く、史跡や遺跡、文化財を扱った郷土資料館や記念館が多数存在します。かつ、相模湾に面し、箱根連山・丹沢山系を控えた豊かな自然とその恩恵を受け、地場産業に基づいた個性的な博物館や伝統工芸品をテーマとした美術館が見られます。また、箱根・湯河原などの温泉と観光地の特性を活かして、専門性の高い国際的なコレクションを擁した多種多様なミュージアムが複合している地域です。

連絡会は、この地域の全ミュージアムに近い 50 の館園に、箱根美術館とは姉妹館の関係にある MOA 美術館（熱海市）が加わり、県域を越えた幅広い構成になっています。

2. 多彩に展開されている“ミュージアム・リレー”

さて、連絡会が生涯学習に配慮し、相互交流や施設のサービスの向上の観点から実施している事業に“ミュージアム・リレー”（以下、リレーと称す）と名付けた活動があります。これは、連絡会が発足した翌年の 1997（平成 9）年 10 月から毎月 1 回、持ち回りで実施している行事で、特別展や企画展の期間中、園内の草花が美しい時期、寒梅や紅葉の見頃に計画されるなど、各館園の独自性が発揮されています。内容は展示解説やギャラリートーク（写真 1）、周辺史跡や遺構の見学、箱根火山の自然や植物観察（写真 2）など、多岐にわたります。とくに、ポーラ美術館などの名画・名品の解説と鑑賞は、人気が高く、箱根ラリック美術館などの新しいミュージアムでの開催も期待されています。

変わったプログラムでは、報徳博物館の「二宮尊徳のありし日の食事」の試食や小田原フラワーガーデンの温室で熟した果実と市販の同果実の比較、南足柄市郷土資料館の施設を拠点に練習しているグループの「相模人形芝居」の上演が組み込まれていたことです。彫刻の森美術館では「夜のアートファンタジー 2001」に合わせて、昼とライトアップされた夜の 1 日 2 回、野外作品を鑑賞しました。箱根町立郷土資料館では企画展とこれに因む計画に、文化財に指定されている営業中の一般旅館の建造物内部の見学が含まれており、定員を超える応募に対して、午前と午後を入れ替えて実施しました。真鶴町立中川一政美術館と遠藤貝類博物館、小田原城内にある天守閣と動物園、小田原城ミューゼ、また、箱根湯本の箱根ベゴニア園と箱根おもちゃ博物館、オルゴールの小さな博物館のように、隣接した

ミュージアムが合同で開催することもあります。1 日で異なった分野が学べ、参加者に好評です。当館でも単独開催のほか、近隣の本間寄木美術館や鈴廣のかまぼこ博物館と共催しています。当館での主な内容は、館長の講話や特別展示の担当学芸員による解説です（写真 3）。

3. 参加する生徒の知的好奇心を誘発

リレーを開催して特筆することは、一般参加者とともに、不登校生を多く含む学園が授業の一環に位置づけて、第 1 走から参加していることです。このきっかけは、第 1 走の当館の展示見学と＜地球物語＞「宇宙のなかの地球」の講話で、壮大な地球展示と宇宙の話は、生徒に新たな発見と感動があり、次も参加したいと要望があったとのことです。学園には直ぐに「地球を知ろう」という研究グループが結成されました。このグループは当館が 2001（平成 13）年度に文部科学省から委嘱された＜親しむ博物館づくり事業＞「恐竜手づくりプロジェクト」にも参加して、手づくり恐竜を披露しました。

生徒に興味・関心のあるプログラムは体験や実習が計画されているものです。例えば、本間寄木美術館の寄木によるコースター製作（写真 4）、箱根武士の里美術館の鎧の着用や刀の重さ体験、かまぼこ博物館の蒲鉾と竹輪作り、箱根ガラスの森のアクセサリー作り、江戸民具街道の菓子型を用いての粘土細工、強羅公園の体験工房でのモノ作り、自然や植物観察、史跡巡り（写真 5）などです。

第 2 走の箱根美術館での茶の湯と生け花体験から、茶道と華道の同好会が誕生し、関係者が協力したことがあります。2000（平成 12）年 10 月の学園際では、「ミュージアム・ツアーにようこそ」と題し、リレーの成果が発表されました。この中で『今まで経験したことのなかったことが体験でき、卒業までに自分の視野を広げ、豊かな人生を過ごすためのステップになります』と紹介しています。そして第 40 走の当館でのリレーの開催日を利用して学園と「地球博士・虫博士を困らせよう」という＜ワクワクゼミ＞を企画し（写真 6）、博士とクイズで対抗しました（写真 7）。会場には前述の学園祭で発表されたポスターも掲示され、生徒が関係者に説明する場がもたれました（写真 8）。リレーがフィードバックされて、関係者も感無量の一時でした。

生徒は教室とは異なる雰囲気で実施される様々な体験から学習意欲を向上させ、主催するミュージアムの多くは、生徒の知的好奇心を誘発する工夫をしています。

4. おわりに

リレー後に開催される関係者の情報交換会も「人と人、館と館のつながり」を深める重要なコミュニケーションの場となっています。この場が利用されて共同企画などが提案されることがあります。2000（平成 12）年には、相互協力により西部地域のミュージアムが一目で判る「ミュージアム・ラリーマップ」を作成しました。2005（平成 17）年にもマップの改訂版を発行し、誘客に努めています。2002（平成 14）・2003（平成 15）年度には、文化庁芸術拠点形成事業の支援が受けられ、『スタンプブック』などを刊行し、地域の小・中学生の学習教材として役立てていただきました。

連絡会の活動は、「各館の所有する博物館資源（人・資料・情報など）を相互に活用しあうことで、大きな活動の舞台が期待できる」とされる、財団法人日本博物館協会の“博物館の望ましい姿”と思われます。ジャンルを超えて、多彩に展開、継続されているリレーは、協会が提唱する「対話と連携」に相応しい活動と言えるでしょう。

リレーを開始した翌年には、ミュージアムを結ぶ新たな路線バスが運行され、沿線 11 箇所のミュージアムが利用しやすくなると同時に、周辺住民の交通の不便さも軽減され、リレーが地域活性化の一助にもなりました。

このリレーは、参加者に支持され、関係者の熱意と自発性により、中断することなく継続されて、来年 2006（平成 18）年1月 14 日の箱根ガラスの森での開催で第100 走を迎えることになりました。第100 走達成記念行事は、同日と翌 15 日の 2 日間にわたって神奈川県博物館協会の後援を得て、日本ミュージアムマネージメント学会との共催で実施します。

これからもリレーを中心とした活動をとおして、地域ミュージアムとして生涯学習や地域文化の発展に寄与したいと、一同念願しています。

なお、第 97 走（2005（平成 17）年 10 月）までの参加は、一般の方が 2,860 名、高校生が 3,320 名、ミュージアム関係者が 1,890 名、合計 8,070 名でした。1 回あたりの平均は、約 83 名です。

写真 5　小田原市尊徳記念館の第 77 走ミュージアム・リレー（2004.2）．二宮尊徳の菩提寺を訪ねる．

写真 6　ワクワクゼミ「地球博士・虫博士を困らせよう」（2001.1　当館）．

写真 7　ワクワクゼミ「博士とクイズバトル」（2001.1　当館）．

写真 8　生徒とミュージアム関係者との対話（2001.1　当館）．